

大学講義の文末表現の機能 —引用助詞「と」で終わる文を例に—

Discourse Functions of quotation marker *to* in Academic Speech

石黒 圭

要旨

本研究は、引用助詞「と」で終わる文の文末の頻度を調査し、その機能を分析・考察したものである。

引用助詞「と」で終わる文末の頻度は、講義者によってばらつきがあるが、講義の要所で使われる傾向がある。

また、その機能は、四つに分かれる。一つ目は引用表示機能であり、これによって受講者は、引用を引用として理解でき、理解の精度が上がる。二つ目は構造表示機能であり、これによって受講者は、かかる先を前後の文に見出し、引用部の講義者の意図を的確に解釈できる。三つ目は文脈補填機能であり、これによって受講者は、前後の文脈を補うものとして引用部の内容を理解できる。四つ目は談話境界機能であり、これによって受講者は、内容のまとまりを意識し、新たな話題への移行を予測できる。

こうしたことから、引用助詞「と」で文が終わる文末を留学生が的確に理解できれば、講義聴解力の向上が期待できる。

キーワード：大学講義、文末表現、引用助詞「と」、聴解力

1 はじめに

本稿は、人文科学系の大学学部の講義に出現する、引用助詞「と」で終わる文の文末について検討を行うものである。具体的には、そうした文末が、講義のなかでどのぐらいの頻度で用いられているか、また、そうした文末が談話構成上どのような機能を持っているかについて分析・考察を行う。そして、そのようにして得た分析・考察を、留学生の講義聴解の指導に役立てることを目指すものである。

2 先行研究

講義という談話に出現する、引用助詞「と」で終わる文の文末を考える場合、講義の表現研究に位置づける見方と、引用助詞「と」の文末研究に位置づける見方とがありうる。本節では、この双方の見方について先行研究を概観する。

2.1 講義の表現についての先行研究

講義談話の研究は、これまでおもに日本語教育学のなかで行われてきた。日本国内の大学に在籍している学部留学生が、日本語で行われる大学講義を聴き取れる必要があったからである。

日本国内の大学でも、英語による教育を行う大学・学部が徐々に増えてきてはいるが、多くの大学・学部では今日でも日本語での講義が中心である。とくに、留学生が多く在籍する人文科学系 (41.8%)、社会科学系 (28.0%)¹においては、日本語での講義が主流である。

大学の講義は、学術日本語 (Academic Japanese) の一つに位置づけられる。語彙面では、当該分野の専門語など、漢語や外来語を中心とした難解な語彙が用いられ、文法面では、講義特有の特殊な文型が使われ、それが留学生の聴き取りの障害になっていると予想される。

そこで、講義でよく使われるそうした表現を取りだし、集中的に教育することが専門日本語教育にとって重要な課題と考えられる。事実、1983 年の「留学生 10 万人計画」の提唱に呼応する形で、日本国内の大学での日本語教育が本格化した 80 年後半から 90 年代前半にかけて、講義の研究は関心を集め、本格的に着手されるようになってきた (重松・長谷川 (1988)、金久保ほか (1993) など)。その後も、講義を扱った研究は断続的に行われており、まとまったものとしては佐久間まゆみ編著 (2010) が挙げられる。

本稿のように、引用助詞「と」で終わる文末表現を、講義の研究として対象にしたものは管見のかぎりではないが、たとえば、小沼 (2009) では引用が、宮澤 (2011) では文末表現が、それぞれ扱われている。

2.2 引用の表現についての先行研究

引用助詞「と」で終わる文末を、引用研究史のなかに位置づける見方も考えられる。

日本語における引用の蓄積は膨大で、文末の引用表現にかぎってみても、カジュアルな会話で頻出する「って」についてはかなり研究が多い (三枝 (1997)、岩男 (2003) など)。

一方、本稿で扱う引用助詞「と」で終わる文末を最初に詳しく取りあげたものに、国語研 (1963) がある。「と」の後続要素の省略と考えられる「引用文切れ」と、慣用的に定着しており、文の終止として見なせる「ト終止文」に分けて考察されている。国語研 (1963)

¹ 独立行政法人日本学生支援機構の 2014 年度外国人留学生在籍状況調査結果の専攻分野別学部留学生数による (http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data14.pdf)。この数字には、大学学部だけでなく、大学院、短期大学、高等専門学校、専修学校 (専門課程)、大学進学を目的とした日本語教育機関など、いわゆる留学ビザを持つ学生すべてが含まれている。なお、実数で言うと、人文科学系が 76、912 人、社会科学系が 51、507 人である。

で指摘されているように両者の区別は難しく、本稿ではこの両者について区別をとくに行わないが、重要な指摘である。

そして、国語研(1963)を飛躍的に進めた研究に、加藤(2010)がある。加藤(2010)は話し言葉における引用表現を包括的に扱ったもので、引用助詞「と」で終わる文末についても詳しく論じている。講義の文末表現に対象を絞ったものではなく、独話の用法と対話の用法の双方に言及があるため、独話、とくに講義に特化して引用助詞「と」で終わる文末を詳しく論じる本稿とはカバーする範囲が異なるものの、参考になる点は非常に多い。加藤(2010)が挙げている用法のうち、本稿に関連のあるものについては、適宜言及する。

3 本稿で扱う講義データの概要

本調査データは、2011～13年度科研費の基盤研究(B)「大学学部留学生のための講義の談話に関する研究」(課題番号:23320110、研究代表者:佐久間まゆみ)の研究成果として得たものであり、収集した講義は全部で14種存在する。

その内訳は、30代男性による講義A(文章表現論)、30代女性による講義B(文章表現論)、40代男性による講義C1、C2、C3(現代文学)、40代女性による講義D(応用言語学)、50代男性による講義E1、E2、E3(日本語学)、50代女性による講義F1、F2、F3(発達心理学)、40代男性による講義G(社会言語学)、50代女性による講義H(日本語学)となる。

このうち、当該科研を用いて詳しく分析を行った講義A、講義B、講義G、講義Hの4種を分析の中心とし、本稿ではこの4種の講義の表現の特徴について詳しく分析する。その分析に先立ち、この4種の講義の内容と性格についてあらかじめ示しておくことにしたい。

講義Aの内容は、日本語の接続詞による「言い換え」の技法について、まず、「リダンダンシア」を例に定義をして、次に、書き言葉の「言い換え」の特徴として、接続詞「すなわち」「つまり」「要するに」の用法を述べる。さらに、話し言葉の「言い換え」について、接続詞「ていうか」の用法を説明し、最後に、講義内容の要点をまとめ、次回の予告をするというものである。

講義時間は約62分であり、半年間続く講義の3分の2を過ぎたあたりの講義である。配布されたハンドアウトをもとに講義が展開され、板書はほとんど行われない

講義Bの内容は、レトリックにおける「多重」の技法について、まず、「SUNOMO(スノモ)」を例に定義をし、次に、親父ギャグや駄洒落、さらに、文学作品における「引用」の技法として「金言使用・隠引法・暗示引用・明示引用」の例を説明し、「引用の多重」の技法をまとめる。そして、井上作品の「パロディの多重」の例を紹介して、最後に、次回の予告をするというものである。

講義時間は約51分であり、半年間続く講義の半分に差しかかったあたりの講義である。ハンドアウトが配布され、キーワードのみ板書が行われる。

講義 G の内容は、「日本語の人称表現」について、まず、社会言語学の「種類」「選択」「変化」に基づく講義の課題の定義と四つの特徴を示し、次に、人称表現の種類・話し手・聞き手や状況・時代変化の例と用法を述べ、最後に、日本語の人称表現の四つの特徴を反復して講義内容をまとめ、終えるというものである。

講義時間は約 97 分である。調査用に特別に行われた講義で、パワーポイントのスライドがもっぱら用いられ、板書はまったく行われぬ。また、ハンドアウトも存在しない。

講義 H の内容は、「日本語の動詞の活用」について、二つ（変格活用を含めると三つ）のタイプがあり、国語教育と日本語教育では二つのタイプの名称や活用の考え方が異なることを示したあと、その二つのタイプを語形から見分ける方法を提示し、そこには古典語から現代語になる際の変化の痕跡が残っていることを指摘し、終えるというものである。

講義時間は約 96 分半である。調査用に特別に行われた講義で、ハンドアウトがあり、そこに活用などを書きこむようになっている。また、板書が非常に多い点がこの講義 H の特徴である。

4 引用助詞「と」で終わる文末の出現頻度

引用助詞「と」で終わる文末の分析に入るまえに、その出現頻度と全体にたいする割合について見ておきたい。出現頻度は、次の通りである。

表 1 引用助詞「と」で終わる文の出現頻度

	講義 A	講義 B	講義 C1	講義 C2	講義 C3	講義 D	講義 E1
～と。	4	18	24	14	26	14	1
全文数	418	473	616	567	422	566	585

講義 E2	講義 E3	講義 F1	講義 F2	講義 F3	講義 G	講義 H	合計
4	4	32	16	12	11	47	227
694	668	784	716	809	616	869	8803

全文数にたいする出現頻度の割合は 2.6% である。割合から考えて頻度が高いわけでは無いが、当該形式が要所に出てくる講義は一定数存在し、留学生にたいする指導の意義はあるように思われる。一方、あまり出現しない講義もあり、講義者の話癖による偏りがあるようにも感じられる。

ここからは、講義 A、講義 B、講義 G、講義 H²を対象に、機能を詳しく分析・考察する。引用助詞「と」で終わる文は全体で 80 例であり、それを母数として分析・考察を進めたい。

² この四つの講義には、付随する理解データが存在する。将来的には受講者の理解との関係を見たいと考えているため、この四つをとくにあげた。

5 引用表示機能

まず、引用助詞「と」が文末につくことによって、前接する内容が引用であることを表示する引用表示機能を持つものを考える。こうしたものは引用動詞の省略と考えられる点で、国語研（1963）の「引用文切れ」、加藤（2010）の「接続部省略系」と関連する。学術的な内容を説明する講義という談話の性格上、引用表示機能は、次の三つのタイプに分かれる。

- ① 資料の引用：講義者が事前に準備した資料の引用
- ② 板書の引用：講義者が板書している板書内容の引用
- ③ 思考の引用：講義者自身が考えた思考内容の引用

5.1 資料の引用

一つ目は、配布されたハンドアウトや映しだされたパワーポイントなど、講義者が事前に準備した資料に言及し、それを読みあげるときに出現する「と」である。こうした例は、9例観察された。

- (1) で、その主人公がゾロリっていうんですけど、それが「繰り出す『コンドルがよるこんどる』といった言葉遊びの数々は、おやじ自身が口にしているうちは、『さぶー！』とひんしゆくものだったはずなのに、いつしか子ども心をとらえていたらしい。」と。(講義 B)

「と」で終わることによって、前接する内容が資料からの引用であり、そこで引用が終了することが示される。それによって、受講者は、今話された内容と資料とを照合するきっかけとなる。つまり、「と」には、受講者に、講義者と一緒に資料に書かれた内容を確認させる働きがあると考えられる。

5.2 板書の引用

二つ目は、講義者がある内容を板書しながら、それを同時に読みあげるときに出現する「と」である。加藤（2010）の指摘する自己確認納得用法に近い。こうした例は18例観察された。

- (2) {動詞の活用の分類を示しながら}
えーっと、これが一類。{板書}
こちらが二類と。{板書} (講義 H)

「と」で終わることによって、前接する引用部が、今板書が行われている内容であることが示され、受講者は板書されている内容に注意が向けられる。つまり、「と」には、受講者に、講義者と一緒に板書という作業をしているかのように感じさせる働きがある。

5.3 思考の引用

三つ目は、講義者が自分自身の考えを示すときに出現する「と」である。「と」の直前に「か」「かな」「な」などがつき、声の調子も変わるところからそれとわかる。11 例観察された。

(3) {夏目漱石『坊っちゃん』の主人公を評して}

で、そうするとね、実は {笑い} ロベたで、内向的な {笑い} キャラなんじゃないかと。（講義 B）

「と」で終わることによって、講義者が自分の考えを受講者に押しつけることを回避させている。そのことで、受講者はこの部分を、講義者個人の判断としてではなく、穏当な推論から導かれた必然的な結論として感じ取ることができる。

なお、話し手以外の考えが引用助詞「と」の文末で示されることは講義ではほとんどなく、講義者が導入した登場人物の考えを表す 1 例が見られるに留まった。

(4) で、かわいそうで、「今日は、水汲むの、止めとこう。」と。（講義 B）

5.4 引用表示機能のまとめ

以上、資料の引用、板書の引用、思考の引用、それぞれの例から、講義者が文末に「と」をつけることによって、やってみせる働きがあることがわかる。

「と」がないと断定口調になって、情報を与える講義者と情報を受け取る受講者という対立の構図が明確になり、引用の内容を受講者に押しつけるような響きが出てしまう。一方、「と述べています」「と書いています」「と 생각합니다」のように引用動詞を明示すると、講義者が引用内容をどのように認識しているかに重点が置かれてしまい、受講者の注意は引用の内容ではなく、引用という行為に向いてしまう。

しかし、引用動詞を明示せずに「と」で文を終わらせると、目の前で実演しているかのような印象をかもしだせる。そのことによって、講義者と受講者の立場の対立を中和し、講義者と受講者があたかも一緒にやっているかのような協働性を示すことができ、受講者を引きこむ役割を果たすことが可能になる。

6 構造表示機能

次に、引用助詞「と」が文末につくことによって、「と」の続く先が存在することを表す構造表示機能を持つものを考える。構造表示機能は、続く先が同じ文のなかに存在する 1 文内の倒置、前の文に存在する先行文脈への依存、後の文に存在する後続文脈への依存という次の三つのタイプに分かれる。

- ① 1文内の倒置：「と」の続く先が同じ文のなかに存在する
- ② 直前の文への依存：「と」の続く先が直前の文に存在する
- ③ 直後の文への依存：「と」の続く先が直後の文に存在する

6.1 1文内の倒置

一般に話し言葉では倒置が多いとされるが、同一文内で引用部が文末に転出する例はさほど多くなく、2例のみ観察された。(5)はその例である。

- (5) それから、次ですけれども、えっと一、「父」と「母」というのも、さっき言いましたけれども、3人称として使われると。(講義 G)

構造的に見ると、『父』と『母』というのも、3人称として使われると、さっき言いましたけれども」の引用部「3人称として使われると」が文末に転出していると考えられることができる。一方、内容面で見ると、引用部が文末に転出したことで、その部分が際立つ効果が得られる。

6.2 直前の文への依存

1文内の倒置では、引用部が述語のあとに転出するが、その述語が言いきられているときは、直後の文に転出したと考えることができる。その結果、「と」の先に続く述語は直前の文に存在し、そこに依存することになる。こうした例は、7例観察された。

- (6) {五段活用の説明で}
あの、「こ」まで数えて五段なんですね。「か」「き」「く」「け」「こ」、と。(講義 H)

構造的に見ると、『か』『き』『く』『け』『こ』、と、「こ」まで数えて五段なんですね。」の引用部が直後の文に転出したと考えることができる。一方、内容面で見ると、(5)と同様、引用部が文末に転出したことで、その部分に受講者の注意が向くことになる。

6.3 直後の文への依存

6.2の直前の文への依存とは反対に、直後の文に依存することがある。引用助詞「と」で終わり、発話時点ではかかる先がわからないので、その文自体は構造的に不安定になる。しかし、直後の文が発話され、そこにかかっていくことがわかると、構造的に安定する。こうした例は、6例見られた。

- (7) それが見分けられれば、一段形は弱変化だから、もう、簡単にくっつけばいいと。で、それ以外のやつは、ちょっと面倒くさいけど、音便もあるけどっていう話になるんですね。(講義 H)

(7)では、文末に引用助詞「と」があることで、「一段形は弱変化だから、もう、簡単にくっつけばいい」と「それ以外のやつは、ちょっと面倒くさいけど、音便もあるけどって」が並列され、「いう話になるんですね」に流れこむことが明確になる。

6.4 構造表示機能のまとめ

文は、本来、構造的に独立性の高いものである。しかし、独立性の高い文は、前後の関係が形態的に表示されないため、前後の関係がわかりにくくなることがある。

そうした場合、接続助詞で言いさしたり、引用助詞「と」を付加して終えたりすることで、前後に存在する表現に容易に接続できるようになり、構造的に安定させることができる。

文内・文外の違いはあるが、1文内の倒置でも、直前の文への依存でも、引用助詞「と」で文を終えることで、倒置構造が容易に把握できるようになる。

一方、直後の文での依存では、引用助詞「と」で文が終わることで、いったんは構造的に不安定になるが、直後の文に「と」の先に続く表現を見出すことで、構造的にかえって安定する。いずれの場合でも、引用動詞のない「と」がつくことで、依存する引用動詞を前後に探して結びつこうとする、いわば「手」のような役割を果たすのである。

7 文脈補填機能

さらに、引用助詞「と」が文末につくことによって、前後の内容を補填することを示す構造表示機能を持つものを扱う。次の二つのタイプに分かれる。

- ① 先行文脈の補填
- ② 後続文脈の補填

7.1 先行文脈の補填

講義者が説明をしていくなかで、受講者にとって理解しにくい表現を導入したと感じたとき、その表現の詳しい内容について、後続の文のなかで引用助詞「と」を使って補填することがある。こうした例は、29例存在した。

- (8) で、えっと一、最後の話になりますけれども、これは、「鈴木孝夫」という、元々、ま、慶応大学の、えーっと、あの、言語文化研究所というところにいた方ですけども、この方がですね、えっと一、「家族内の呼称の原則」というのを、確か70年代だったかな↑、に出しています。で、どういうものか、というと、あの一、目上の者は目下の者に名前呼びかけられるが、目下の者は目上の者に名前では呼びかけられず、親族名称を用いる、と。(講義 G)

講義者は、鈴木孝夫氏の「家族内の呼称の原則」という新たな概念を導入している。そして、その概念を説明することを「どういうものか、という」とで予告し、文末の引用助詞「と」を用いて、この文末までが「家族内の呼称の原則」という概念の具体的な内容であることを示していると考えられる。

7.2 後続文脈の補填

一方、6.3 で見たように、引用助詞「と」で文を言いおえ、かつ、先行文脈に構造的に依存したり、先行文脈の情報を補填したりしていない場合、そこまでで内容が言いきられている感じがせず、後続の文を待って情報の処理を求められているような印象を聞き手は持つ。引用というものは、本来、内容の素材表示であり、提示された素材を話し手が解釈して初めて表現の意図がわかるものだからである。

そのため、引用助詞「と」で文が終わった場合、その引用部を受ける表現が直後の文の冒頭部に現れ、それに続いて引用部の解説が行われることが多い。ここでは、引用部を受ける表現を、指示、省略、反復、換言の四つに分けて見ていく。

まずは、指示の例である。13例見られた。

- (9) まあ、非常に大雑把に言ってしまうえば、「すなわち」よりも「つまり」のほうが2倍、「要するに」は3倍、解釈の入る度合いが高いと。まあ、単純化しすぎかもしれませんが、そのようなことが、いえるだろうと思います。(講義H)

「解釈の入る度合いが高いと」と引用助詞「と」で終わると、「解釈の入る度合いが高い」と言いきったときと比較し、そのままでは落ち着かず、続きが気になる印象がある。しかし、

「そのようなことが、いえるだろうと思います」と、「そのようなこと」という指示語を用いて引用部の内容を受け、「いえるだろうと思います」でその内容をまとめることで、受講者の聴き取りを助けている。

一方、指示語を省略することも文脈によっては可能である。4例見られた。

- (10) えー、「都の真南 伏見の杜 [もり] に…毎日食べたい ケツネのうどん 輝くわれらが社前を見よや」と。(φ) かつねの大学で、「コン大の校歌」ってことに {笑い} なってるんですね。

(10) では、直後の文で引用部にたいする解説が与えられ、情報面での安定を得ている。次は、反復の例である。指示語で受けなおすと、意味がぼやけることもあり、引用助詞「と」で導入される文の文末を繰り返すこともある。10例見られた。

- (11) ただ、書き言葉における言い、言い換えと、話し言葉に、い、おける言い換えというのは、少し違いがありまして一、書き言葉における言い換えっていうのは一(4)、推敲ができる、あとから直せると。直せるにもかかわらず、あえて二つの表現を残していたということから、戦略的な言い換え、つまり、意図的な言い換えなんですね↑。(講義 A)

引用助詞「と」があることで話がいったん区切られた印象があるが、同時にそこで話が終わらず、続きがある印象もある。そして、同じ表現を繰り返して焦点を絞り、次の説明へと続けている。

反復に似たものとして、換言がある。換言するということは、すでに述べた内容が伝わりにくいと講義者が判断しているため、言い換えられた内容はわかりやすい傾向がある。4例見られた。

- (12) なんかね、あの、この句の正しい形というのは、「愁ひつつ岡に登れば花茨」っていうのがあるんだそうなんですよ。「愁ひつつ岡に登れば花茨」という句があるんだそうなんです↑。「茨」だけじゃない {笑い} かと。「野」もないし、「茨」の部分だけだよ、と思うんですけど、多分それだ。(講義 B)

講義者が『茨』だけじゃない {笑い} かと」とツッコミを入れたときに「と」がつけられ、その直後にわかりやすい言い換え「『野』もないし、『茨』の部分だけだよ」が挿入され、受講者の理解が助けられている。

7.3 文脈補填機能のまとめ

引用助詞「と」で終わる文は、前後の文脈情報を補填し、内実を豊かにする働きがある。

先行する文を補填する場合は、補填情報を示し、説得力を高める働きがある。また、補填情報が「と」の直前までであることがわかり、その範囲が明確になる。

後続する文を補填する場合は、引用部の内容を提示し、後続文脈でその解説を期待させる働きがある。受講者にとっては、自然と直後の内容に意識を集中させる効果がある。しかし、その場合、受講者の理解のために、後続文の文頭で、指示・省略・反復・換言を用いて結束性を担保する必要がある。

8 談話境界機能

最後に、引用助詞「と」が文末につくことによって内容上のまとまりが生まれ、その前後で談話の境界があることを示す談話境界機能を持つものを扱う。

談話の境界は、つねに後続文脈とのあいだに生じる。文末の「と」は予定していたまとめに帰結した印象を与え、次文での話題の移行が容易になる。こうした例は30例見られた。

- (13) で、ジャイアンが、「私はジャイアン、がき大将。」と歌い出したら、それはそれで大変なことになりますよね。ですから、やっぱり、「おれ様キャラ」ですからね、「おれ」、ジャイアンは「おれ」じゃなきゃいけない、と。(講義 G)

引用助詞「と」で終わる文の文末が談話の境界を作り出すことで、マクロな構造、とくに話題の推移に関連する列挙の構造を明確にすることができる。(13)の直後の文では、話題がスネオに移っている。

文末の引用助詞「と」が話題の境界を生みだしていることは、直後の接続詞使用率が高いことから窺われる。同様の指摘は加藤(2010:98)にも見られ、その意味で話題境界機能は、加藤(2010)で言う「帰結述べ立て用法」と関連が強いと考えられる。

今回の調査の結果、話題境界機能が直後の文に接続詞を伴う割合は高く、30例中、じつに21例が接続詞を直後の文の文頭に取っている。その内訳は、「で」が13例、「そして」「だから」「要するに」が各2例、「でも」「ただ」各1例であり、講義においては、添加の接続詞の割合が高い様子が看取できる。

(14)は、接続詞「で」によって話題が切り替わる例である。前半の2文は「おれ」から「ぼく」に切り替わる話であり、文末の引用助詞「と」でいったん話がまとめられている。

一方、後半の2文は「ぼく」から「私」に切り替わる話であり、接続詞「で」によって新たな話題が導入されている。

- (14) 今、使い分けるっておっしゃってくださいましたけども、そういうケースもあるわけですけども、でも、またですね、その反抗期が過ぎてくるとですね、で、ま、大学生ぐらいになってくると、なんか「おれ」って言って粋がってた自分が逆に恥ずかしくなってくるんですね。そうすると、あの一、「ぼく」っていうふうには、やっぱり「ぼく」に戻そうかと思うと。で、就職活動っていうのは、実は、一つのターニングポイントでして、就活を始めるようになると、ちょっと「ぼく」じゃ恥ずかしい。それじゃあ、もしかして、あの、社会人として企業に雇ってもらえる、ないかも知れない、っていう意識が芽生えてくる、ので、やはり、もう、あの、自分が、まあ、1人で自立して行こうという時になるとですね、「私」というふうに変えるという。

9 おわりに

以上述べてきたことを最後にまとめておく。

引用助詞「と」で終わる文末は、頻度は講義者によってばらつき、かならずしも高頻度とは言えないが、講義の要所で使われる傾向がある。

また、その機能を考えると、四つの機能に分かれる。

一つ目は、引用表示機能であり、引用助詞「と」に前接する部分が、資料の引用であったり、板書の引用であったり、講義者の思考内容の引用であったりすることを示すものである。引用助詞「と」があることで、受講者は、引用部の内容を資料や板書と照らし合わせて確認したり、講義者の考えとして理解したりすることができ、受講者の情報理解の精度が高まることにつながる。

二つ目は、構造表示機能であり、引用助詞「と」に後接する部分が省略されていることで、構造上、直前の文あるいは直後の文に依存していることを示すものである。これによって、受講者は、前後の文とのつながりを意識して聴けるようになり、引用部を講義者がどのような意図で引用したかも汲みとりやすくなる。

三つ目は、文脈補填機能であり、引用助詞「と」で文が終わることで、受講者は、内容面で引用部を前後の文脈を補うものとして理解できるようになる。先行文脈の補填では、難解な概念などが詳しく解説されることがわかり、後続文脈の補填では、指示語・省略・反復・換言などを示す形式が直後の文の文頭に来ることと合わせて、連続した内容として理解することが可能になる。いわば結束性を予測させる形式として働いているわけである。

四つ目は、談話境界機能であり、引用助詞「と」で文を終えて帰結点を示すことで、受講者は、そこまでの内容がひとまとまりになることを意識できるようになる。その結果、次の文を読む姿勢として、新たな話題に移ることを予測できるようになる。こうした予測が正しいことは、直後の文の文頭に、並列を表すものを中心に、接続詞が高率で出現することからも裏づけられる。

なぜ、このような引用助詞「と」で終わる文末が講義で発達しているのかを考えると、講義は計画性の高い談話であり、外部から取りこんだ情報をパッチワークのように紡いでいくため、準備した材料をなぞる作業が必要であるからだと考えることができる。

しかし同時に、講義は即興的なものであり、その場で情報を紡ぐ作業は手探りの作業にならざるをえない。結果として、言いきらず、かといって認識も明示しない「と」という中途半端な形式が便利であり、よく使われるのではないだろうか。

このような引用助詞「と」で終わる文末の機能に習熟すると、引用部の情報の理解の精度が上がり、前後の文脈との関係がより適切に把握できるため、講義の聴解力の向上につながるが見こまれる。その意味で、引用助詞「と」で終わる文末を日本語教育で教えることは意味のあることである。

今後は、講義のデータを増やして考察を深めることはもちろん、文末だけでなく文中の「と」にも着目し、「と」という標識がもたらす役割を広く見ていく必要があるだろう。また、今回扱った講義データには、ノートや要約文といった母語話者と学習者の理解データも存在するので、それらをあわせて見ていくことで、日本語教育への具体的な示唆が得られるだろう。

さらに、「と」に似た役割をし、講義によく出てくる表現に「ように／な」と「ふうに／な」がある（宮田（2014）、恵谷（2014）を参照）。こうしたものも合わせて見ることで、間テキスト性の高い講義の特徴を明らかにしていくことができると思われる。

参考文献

- 岩男考哲（2003）「引用文の性質から見た発話「～ッテ。」について」『日本語文法』3-2、pp.146-162
- 恵谷容子（2014）「講義に見られる『～ようなN』について」石黒圭編『「大学学部留学生のための講義の談話に関する研究」論文集』、pp.86-95
- 小沼喜好（2009）「大学の講義における引用の働き」『外国語教育論集』31、pp.137-148
- 加藤陽子（2010）『話し言葉における引用表現—引用標識に注目して』くろしお出版
- 金久保紀子・金仁和・本田明子・松崎寛（1993）「講義の日本語における理科系・文科系の特徴」『日本語教育』80、pp.74-90
- 国立国語研究所（1963）『話しことばの文型（2）—独話資料による研究』秀英出版
- 三枝令子（1997）『「って」の体系』『言語文化』34、pp.21-38
- 佐久間まゆみ編著（2010）『講義の談話の表現と理解』くろしお出版
- 重松淳・長谷川恒雄（1988）「講義の聴解指導」『日本語教育』64、pp.99-108
- 宮澤太聡（2011）「講義の談話の『話段』におけるノダの統括機能と展開的構造」『文体論研究』57、pp.37-51
- 宮田公治（2014）『「日本語機能文型」から見た講義の談話の特性』石黒圭編『「大学学部留学生のための講義の談話に関する研究」論文集』、pp.34-43

（いしぐる けい 一橋大学言語社会研究科連携教授）